

## 人生筑波大学と共に 一創設準備室から第二の人生まで一

金野龍一

元大阪外国語大学学生部長

現財団法人 筑波学都資金財団 筑波大学学生宿舎管理事務所 評議員兼総務課長

事務系のOBの人で、執筆をという依頼を受け、種々考えた末「漫筆漫歩」という、これといってあてもない、思いつくまま気の向くままの項目でペンを執ることにいたしました。

### 筑波新大学創設準備室の思い出

さて、私にとってなんといっても忘れられないのは、創設準備室の思い出です。

創設準備室は、現在の東京・大塚にある東京キャンパス、当時の東京教育大学の一番奥の片隅にあったK館という木造二階建の施設に、昭和48年4月に発足いたしました。この建物は、歩くたびに床や階段は「ミシミシ」と音がし、戸は「ガタビシ」ねずみでも出そうな木造老朽校舎で、今では想像もつかないたずまいでした。また、勤務も徹夜あるいは、ほとんどが、毎日深夜に及ぶため、帰宅の際は大学職員の守衛さんも仮眠に入り校門も閉められてしまうので、

門扉や扉によじ登り乗り越えて出たり、夜おそくまで走っている東京での最終電車もなくなることも度々で、まさに、仕事に追われて、後も見ず走りながら、物事を考えるという状況がピッタリの苦闘の時代で、今となれば貴重な経験となりました。

この、K館を根城に当初、8月までは、概算要求の資料作成の仕事が主役となり、事務局等職員の移行計画、新大学の事務組織の年次計画や、研究補助職員の待遇改善のための機構図及びセンターの設置計画等々、山のように仕事がありました。8月以降は、昭和49年4月から開設される第一学群と体育及び医学専門学群に関わる設置審査の仕事が主だったと記憶しています。

何せ、我が国最初の新構想大学なので、参考にする先例もないため、当時「青本」といわれていた「筑波新大学創設準備会」がまとめた「筑波大学の創設準備について」をいつも片手に一からやらねばならぬ仕事

ばかりでした。10月の設置申請の締め切りが刻々と近づくが、カリキュラムさえもでき上がらない状態で、メンバー一同が「イライラ」していたことがなつかしく思われます。10月には国会で法案が成立し、待望の筑波大学の事務局がサッカー場北側の体育合宿所に、なんとか仮事務所を置く運びになった次第です。

### 筑波大学の開学当時の環境

私は、この創設準備室から昭和48年の10月1日に開学と同時に筑波大学庶務課に転任してきました。当時の筑波大学は、グラウンドと建物は体育合宿所のみで、大学全体が、原野と松林のわびしい風景で、わずかに体育・芸術専門学群中央棟と同図書館、総合体育館等と平砂学生宿舎の一部の基礎工事が終り茶色の鉄骨が建ち始めている状態で、東京から来た私にとって本当に、この地に大学ができるんだろうかと半信半疑の不安いっぱい環境でした。10月4日に先に述べた体育合宿所で、感激の筑波大学事務局開所式が行われ、初代三輪知雄学長と初代長崎憲之事務局長の手によって「筑波大学」の真新しい看板が掲げられ、ここに筑波地区での第一歩を踏み出したのでした。創設期というのは、どこの大学でも関係者が一丸となって血のにじむような努力をしながら、でき上がっていくものである

ことは十分に承知しながらも、あの時のような勤務及び生活環境の中では、できれば仕事をしたくないというのが偽らざる心境でもありました。しかし、その反面昭和49年4月より、学生受け入れが始まるため、至る所でブルドーザーの騒音が鳴り響き、また、各建物が急ピッチで工事が進められ、日に日に変貌していく姿を見て、「よし、やるぞ。」というファイトが沸いてくるのを感じたものでした。

雨が降れば泥んこ道になるため、長靴を履き、また、筑波おろしの風が吹けば猛烈な砂塵が舞い上り、悩んだものでした。それから、新構想大学ということで、全国から見学者がひっきりなしに来訪するため、見学者対応が一仕事でしたが、特に報道関係者の依頼で、当時の日本の大学としては、最先端を走っていた学生宿舎の建築現場案内のため、まだ道のできていない原野や山林を、雑草をかき分け松林をくぐり抜けながら、バラにひっかかったり、蜘蛛の巣が頭や衣服についたりして、今となれば夢のような貴重な思い出です。とにかく、こんな環境の中で、日本における最初のモデルケースとして国民的期待と注目を浴びながら、新構想大学として、国際A級大学がキャッチフレーズの理想実現のため出発したのでした。

## 筑波大学の発展をめざして

開学してからも、きびしい環境は続きま  
した。夜になると周囲一帯がシーンと静ま  
りかえり、真っ暗闇で昼の騒音から一変し  
気分が悪い程でした。帰宅の際は朝あった  
はずの道は工事のためなくなっていたり、  
また、工事の穴に落ちる人や、野犬に襲わ  
れる人がいた他、家庭生活では、買い物を  
するにしても、店がなく土浦まで出て一週  
間分買い出してきて冷蔵庫に保存したり、  
子供の幼稚園等でも近くにないため苦労  
した思い出があります。一方仕事の方もか  
なり忙しく、当初は、次から次へと開設さ  
れる学群や大学院研究科の大学設置審議会  
に提出する設置申請の仕事等すさまじい仕  
事量で、とにかくこの時期は、相当な健康  
の持ち主でないと言っても過  
言ではない程の時代でした。私は、この後、  
学生部学生課、総務部総務課、研究協力部  
研究協力課、体芸事務区（総務・研究協力  
担当）、学生部学生相談課と異動し、筑波大  
学に約17年間お世話になり、その後平成2  
年7月1日付で、管理職として全国を転勤す  
ることになりました。この間微力ながら、  
人生を筑波大学と共に歩み「筑波大学の発  
展をめざして」大学創設等の一端を担わせ  
ていただき、何とかか任務を全うできまし  
たことは、先生方はじめ、上司、先輩、同僚、  
後輩等の皆さんの御指導と助言があったか

らこそと、あらためまして、この紙上をお  
借りし、心から感謝申し上げます。

## 一高専と四大学を転勤して・・・

私は、このような訳で、故郷同様の地にな  
っていた「つくば」から、縁あって新潟  
県にある「長岡工業高等専門学校」を皮切  
りに、四国の「徳島大学」、関東の「茨城大  
学」、中国地方の「広島大学」、そして関西の  
「大阪外国語大学」に勤務させていただきました  
が、それぞれの地で、大学改革等の  
経験と楽しく充実した「仕事」ができ、また、  
他大学等でも沢山の方々との出会いがあり、  
公私にわたり皆様から温かい御指導と  
御支援を賜り、何とか勤めあげることがで  
きたと思っています。この間、行財政改革、  
教育改革、大学間の統合、国立大学の法人  
化等、本当に激しい変化の中でいい勉強を  
させていただきました。特に印象に残って  
いるのは、平成11年11月17日東京のオリ  
ンピック記念青少年総合センターにおい  
て、文部科学省主催（当時文部省）の「平成  
11年度厚生補導事務研修会」の講師として  
「広島大学の教養的教育改革の全学研修会」  
の講演を行い、「ファカルティ・デイベロッ  
プメント（FD）」推進の先進大学の事例と  
して、これからの大学が生き残るための教  
職員の意識改革等紹介し、出席者の全国の  
国立大学の幹部職員の皆さん方に、再認識

してもらい、アンケート等でも非常に参考になった旨のご意見と評価をいただいたことで、大変、有意義な機会でした。

## 第二の人生

平成14年3月31日付をもちまして、国家公務員生活を終え定年退職となり、4月1日からは、筑波大学内に設置されている「財団法人 筑波学都資金財団 筑波大学学生宿舎管理事務所」に勤務させていただいております。この財団は、筑波大学の同窓会である「茗溪会」が母体となって設立されたもので、開学以来学生宿舎の運営業務を大学から委託され、お世話をしてまいりました。さて、私が就任早々、当時の副学長から財団を改革してほしい旨の厳しいご指摘をいただきました。このため、財団本部及び所長、経理課長の尽力をいただきながら、先ず、時代に即応した職員の意識改革の徹底、学生宿舎管理事務所ではなく「学生宿舎サービスセンター」的な発想の転換と、学生対応の大切さとサービス向上について、職員とも十分にコミュニケーションをよくしながら、できるだけ改善をし、それなりの成果を上げたと自負しているところでもあります。また、業務についても、経営的視点に立って対応することと、電算化の推進及びサービス低下にならないような合理化、簡素化等も実施しながら、今の

組織としては、最大限の効果を発揮できるよう、日夜努力しています。しかし、30年以上も経過した施設は老朽化が著しく、水漏れ、雨漏れの対応、床や壁の修繕と洗濯機や乾燥機の修理及び膨大な廃棄家電の処理や粗大ゴミ対策等で毎日毎日、頭を悩ませていることも事実であり、大学側の予算措置及び洗濯機のコインランドリー化等含めた、特段の御援助と御配慮等もよろしくお願いいたします。

## 歩こう会&ガマ口上&筑峰会

第二の人生の仕事をしながらか、「筑波大学の歩こう会」に入会し、休日月1回筑波大学の後輩の皆さん方と共に健康のため歩いており、本当にありがたく思っています。

また、大学創設時に、当時の学生達と、筑波山で覚えた「ガマの油売り口上」も、私の得技となり、現在、「筑波山ガマ口上保存会」の副会長として、また、「ガマ口上の公開講座」の講師として、郷土の伝承芸能の保存継承のため、ボランティア活動として精進しています。

最後に、筑波大学の事務系職員（附属病院の看護部等も含む）のOB会「筑波大学筑峰会」の幹事長として、退職者等の情報交換及び親睦交流等図るため、微力ながら頑張っています。

(この りゅういち)